

鳥取県内の水稲有機栽培事例における収量実態

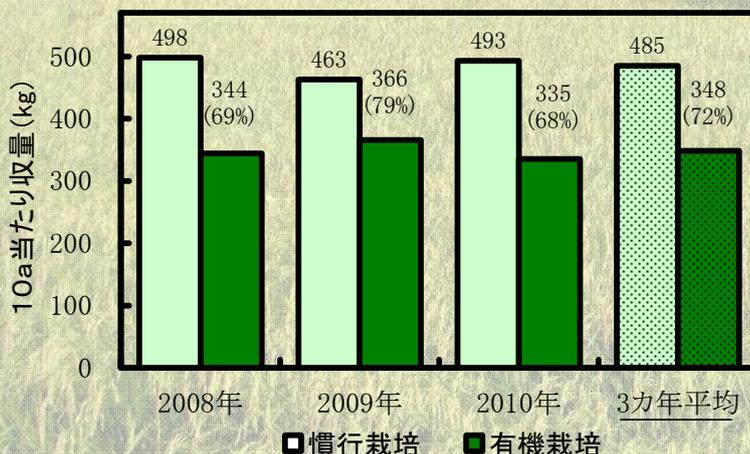
— 皆さんは有機栽培の本当の姿を知っていますか —

今、全国的に有機栽培が推進されています。ただし、有機栽培の技術開発は不十分であり、また、有機栽培を実践する方々の収量性や実践技術など、その実態や課題の把握も十分に行われていないのが実情です。

そこで、技術開発と有機栽培の推進をねらいとして、収量実態と収量に影響を与えている要因を把握しました。



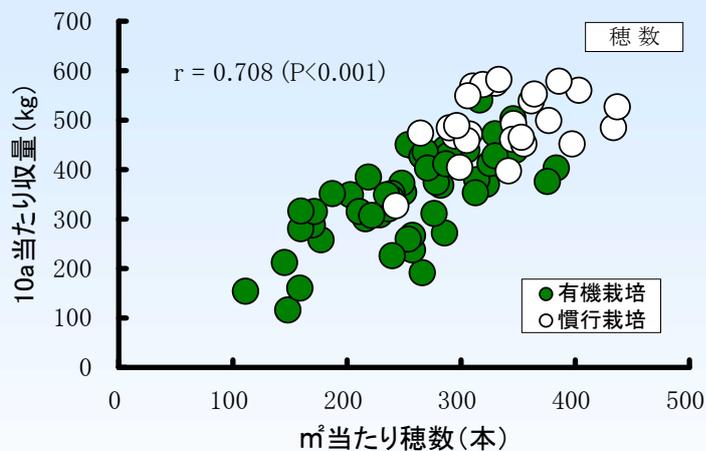
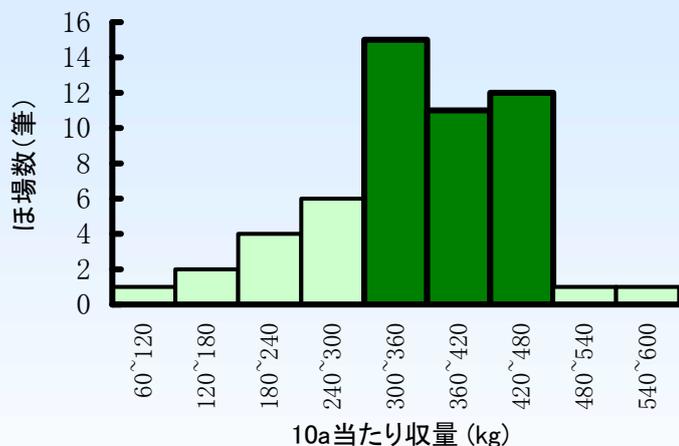
有機栽培と慣行栽培の水稲収量（コシヒカリ、2008年～2010年）



2008～2010年の3年間、県内の水稲有機栽培実践事例(9事例、のべ53筆)を調査した結果、10a当たり平均収量は348kgでした。

有機栽培を実践する方々は、多くの課題や悩みを抱えながらも、努力と試行錯誤を重ね、慣行栽培の約7割の収量を確保しています。

有機栽培実践事例の収量分布と穂数との関係（コシヒカリ、2008～2010年）

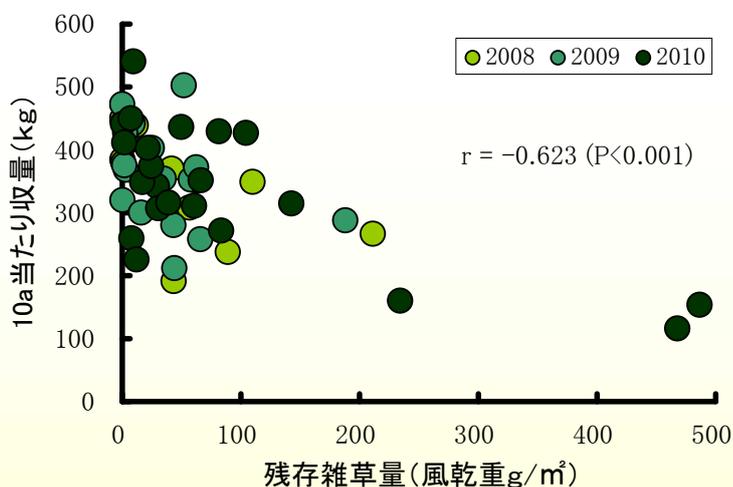


- 10a当たりの平均収量は348kgでしたが、その分布は、300kg～480kg(5俵台～7俵台)が中心となっています。
- 480kgを超える事例が見られる一方で、240kgを下回る事例も多く見られます。

- 穂数と収量には関係性が認められ、低収量の事例では穂数が極めて少ない状況です。
- 慣行栽培に比べて、有機栽培の穂数の水準は全体として低く、このことが有機栽培の収量水準を引き下げています。

有機栽培実践事例の収量に影響を与える要因（コシヒカリ、2008～2010年）

区分	移植日 (月日)	栽植密度 (株/m ²)	移植時葉令 (葉)
平均値	6/1	14.9	4.5
中央値	6/3	15.1	4.6
最小値	5/11	9.5	3.0
最大値	6/21	19.0	6.5
精玄米重との 相関係数 (r)	-0.060 ns	0.193 ns	0.137 ns



- 実践事例の移植時期、栽植密度、苗質の調査を行い、収量との関係を検討しましたが、それぞれの間には関係性は認められませんでした。
- ただし、残存雑草量と収量の間には関係性が認められ、雑草害が有機栽培の収量水準を引き下げる大きな要因となっていることが確認されました。

本書から転載複製する場合には
必ず鳥取県農林総合研究所農業試験場の
許可を受けて下さい。

(お問い合わせ先)
鳥取県農林総合研究所農業試験場 有機・特別栽培研究室
電話 0857-53-0721 ファクシミリ 0857-53-0723
E-mail nogyoshiken@pref.tottori.jp